

## 大手高校の校歌について

明治 36 (1903) 年の開校以来、本校は今年度 117 年目を迎えましたが、この間に歌われた校歌は全部で三つあります。最初の校歌は創立の年に作られ、二番目の校歌が作られた 1928 年までの約 25 年間歌われました。二番目の校歌は、現在の校歌が作られた 1976 年までの約 48 年間歌われ、旧校歌と呼ばれています。そして三番目が、皆さんが現在歌っている校歌であり、今日まで約 42 年間大切に歌い継がれて来ました。

三つの校歌の歌詞を私なりに解釈してみると、今の校歌の解釈が断然難しいと思います。しかし、それはある意味当然の事かもしれません。なぜなら、校歌の作詞者は、校歌制作当時、日本国内ばかりか世界的にも有名な詩人、哲学者であり、ノーベル賞候補にもなった小千谷市出身の西脇順三郎先生であり、その西脇先生が、古代ギリシアの思想や日本の詩歌の世界の伝統的な価値観、さらには仏教の教えなどに基づき、用意周到書き上げた歌詞ですから、そう簡単に誰にでもすぐ分かるような内容のはずがありません。

さらに西脇先生が、「校歌というものには、それを歌う人たちの人生観を指導する哲学や宗教というような、何か精神的なものを込めなくてはいけない」との考えに基づき、一年間をかけて作詞されたのですから、歌詞は荘厳でありながらも、静かで落ち着きのある静謐さを兼ね備えた、奥深く趣のあるものになっています。

歌詞の中でも特に、西脇先生が、重要な意味を持つと強調されておられたのが、1 番、2 番、3 番に共通する「ああ、この学園の人々よ、歌え」という最初のフレーズにある「歌え」という言葉です。先ほど、西脇先生は「校歌というものには、それを歌う人たちの人生観を指導する哲学や宗教というような、何か精神的なものを込めなくてはいけない」とのお考えであったと説明しましたが、その西脇先生が、校歌の歌詞に「歌え」という言葉を繰り返し入れた理由としては、古代のギリシア人が神を祭るやり方の一つに「歌う」という行為があったという事実に基づくのです。西脇先生によれば、古代のギリシアでは、神を祭る行為には三通りあったそうです。その三つの行為というのは、「生け贄を捧げること」、「踊ること」、そして「歌うこと」でした。ですから、「歌うということ」は非常に神聖な行為でしたから、校歌の作詞に当たり、「歌え」という文言を入れたということなのです。

校歌を作曲いただいた三善晃先生も、西脇先生同様に大変著名な我が国を代表する作曲家であり、校歌の発表会当時は 40 代半ばの若さでありながら、東京にある桐朋学園大学の学長を務められておられました。ですから、今の校歌は、超一流の文化人コンビによって作られた、大変素晴らしいものだったわけです。

西脇先生が、神を祭る神聖な行為と話された「歌うこと」の意味について、三善先生が、同じく校歌発表会の日に、大変興味深いお話をされました。

三善先生によれば、「歌うこと」の意味は、大きく二つあるとのこと。一つは「歌合う」という言葉が「歌う」になったというものであり、もう一つは「打ち合う」という言葉が「歌う」になった、というものです。

「歌合う」の「歌」というのは、「心の真実」の事であり、「心の真実を合わせる」「心の真実を人と交流させる」ということが「歌う」という行為になったと説明されました。もう一つの「打ち合う」の方は、人間は、喜びにつけ、悲しみにつけ、何か心に感動を持つ

と、手を打ったり合わせたりしますが、いずれにしても、「歌合う」と「打ち合う」ということを一つにした、「心の真実を、感動を持って人に伝える」という行為が「歌う」ということである、と説明されました。

西脇先生と三善先生の説明によって、「この学園の人々よ、歌え」の「歌え」ということの意味を考えれば、決して、生徒の皆さんに、「校歌を歌え」「みんなで校歌を歌おう」と単純に呼びかけているのではないことが分かるでしょう。

そうではなく、「この学園の人々よ、歌え」と語りかけるように、静かに歌い始める意味は、「この学校に集っている一人一人の心の中にある真実や感動を仲間同士で伝え合い、分かち合おう」というような、神聖で深い人間愛、同胞愛に溢れた、力強く熱いメッセージが込められているように、私は認識しています。だから、「この学園の人々よ、歌え」と、そういった気持ちを込めて歌っています。

ですから、「ああ、この学園の人々よ、歌え」という部分には、「大手高校の生徒で良かった、大手高校の教職員で良かった」という感謝の気持ちや心の真実が込められていることが、とても重要なのです。そして、そのためには生徒の皆さんも、先生方も「大手で良かった」と本当に心の底から実感できるような学校にしていく、今以上に素晴らしい学校にしていく努力を積み重ねていこうという、気持ちで日々行動することが求められているのだと思います。

さらに、私たちが、私たち自身の校歌を、どのように、どのような気持ちで歌えばよいのかについて、三善先生が次のように話されています。「この校歌は、表面的には華々しい曲ではなく、静かな曲です。しかし、本当はその中に熱い思い、深い思い、といったものがたぎっているのです。それを静かな口調で語る、という気持ちで歌ってくれば良いのです」と。

今日は、大手高校の校歌についてお話ししました。時間があれば、私なりの校歌の解釈をお話ししたかったのですが、それはまた次の機会とします。この大手高校を皆さんがどのように評価し、校歌についてどのような感想を持っているのか私には分かりませんが、大手高校の歴史と今まで果たしてきた役割や、校歌に込められた思いなどを、より正しく理解できれば、今皆さんの心の中にある、大手高校への評価と校歌に対する感想は全く違うものになるものと確信しています。単に本校に在学しているだけではなく、大手高校の歴史や伝統、校歌の意味などについて興味や関心を持って欲しいと思います。いずれにしても、皆さん一人一人が、母校の校歌に愛着を持って誇らしく歌うことができるか否か、世間の人から、素晴らしい校歌と高く評価されるようにするためには、ここに集まっている皆さん一人一人が、勉学や部活動、ボランティア活動などを通して、日々己の人格を磨き、人としての器量を大きくするとともに、母校の評価が高まるよう、精一杯頑張ってくれているか否かにかかっているということを、今日の集会を機に、全員が認識認して貰いたいと思います。